

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

金子百合子氏の論文『ロシア語・日本語のアスペクト意味体系における開始性 言語的世界像対照分析の試み』(原文ロシア語)は、ロシア語と日本語において動詞述語によって様々な事象がどう表現されるか、アスペクト性の観点から対照研究したものである。

本論文は第1部「ロシア語と日本語におけるアスペクト的意味の対照」と、第2部「ロシア語と日本語における開始表現」の二部構成になっている。

アスペクトは特にロシア語学において、いまだ未解決の様々な問題を含む重要な研究分野である。このような分野で二言語間の対照研究を行おうとするのは極めて野心的な試みだが、第1部で金子氏は、膨大なアスペクト関係の先行研究の中から意味論的アプローチをとるものを中心に整理する一方で、対照研究の前提となる概念(状況の存在論的三分類、言語的世界像、意味的優勢素など)を丁寧に吟味することによって、この大きな課題を扱うための理論的な基礎を固めている。

この理論的作業の際に金子氏は、意味的優勢素(ある言語社会において支配的な役割を果たす意味)に特に注目した。そして、ロシア語においては「限界/境界」が意味的優勢素であるのに対して、日本語においては「安定性」が意味的優勢素になっている、という明快かつ説得力ある主張を導き出した。

金子氏はこのようにロシア語と日本語の主なアスペクト的表現を対照してその違いを明らかにしたうえで、第2部では日本語・ロシア語資料の独自の調査に基づき、開始表現を定量的に対照することを試みている。最近のロシア語動詞の不変的意味に関する研究では完了体動詞の表す概念と「開始性」との強い連関が指摘されており、金子氏はそれを受けて「開始性」を様々な位相概念の中でも最も基本的なものとして対照研究の焦点に置いた。用いられた資料は近現代の文学作品で、ロシア語原作<sup>8</sup>編とその日本語訳、および日本語原作<sup>6</sup>編とそのロシア語訳が主なものである。

この資料調査によって得られた結果は鮮やかで、それまでの論考から予想された通り、ロシア語のテキストのほうに開始性を表示する表現が多用されていることが明らかになった(ロシア語原作とその日本語訳の間で約2倍、日本語原作とそのロシア語訳の間で約4倍)。これはアスペクト的な表現の領域で、日本語よりもロシア語のほうに「限界/境界」の概念を明確に指示する傾向が強いことをはっきり示すものである。

審査の過程では、「限界/境界」や言語的世界像などの概念規定、日本語におけるアスペクトのとらえ方、資料として文学作品を使うことの問題点などについてさらに厳密な検討が必要だとも指摘された。しかし、それは本論文の高い学術的価値を損なうものではない。そもそもアスペクトの観点から日露二言語をこれほど徹底的に対照した研究は前例がなく、本研究はこの分野における先駆的な独創的業績として高く評価できる。それゆえ、審査委員会は全員一致で、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に至った。